

コウノトリ湿地ネットニュースレター



豊岡市城崎町今津1362
0796-20-8560
toshima8560@iris.eonet.ne.jp
<http://wac-s.net>

No.
27

1 7 1 7

目次



- 放鳥10年目の今年にすべきこと..... 1
- 戸島湿地でのコウノリの繁殖 (2014年の記録その1)..... 3
- 2015年豊岡盆地におけるコウノリ繁殖状況..... 7
- 上田市訪問記..... 8
- 2014年 下宮ククイ湿地のカエルたち..... 10
- ハチゴロウの戸島湿地便り・思うこと・編集後記..... 13



豊岡市内でコウノリたちはたくましく、さまざまな表情を見せながら暮らしています。
写真は今年1月から3月のコウノリの様子



※表紙写真 ハチゴロウの戸島湿地で8年連続孵化！

撮影:2015年4月2日 15時05分(豊岡市提供)

放鳥 10年目の今年にすべきこと

コウノリ湿地ネット代表 佐竹 節夫



3月28日の朝、自宅の部屋の中にツバメが入ってきた。外はいろんな鳥の鳴き声で賑やかだ。「ああ、いつもと同じ穏やかな春がやってきた」と実感する。

春の先陣を切るのは、毎年コウノリだ。すでにヒナが孵化している。わずか10年前に、34年ぶりに豊岡の野鳥世界に帰ってきたばかりだが、今ではすっかり春の風物詩として定着している。この穏やかな風物詩が今後も＝ずーっと何百年先まで＝続いていくことを願うばかりだが、それを確信させるだけの基盤は整っているのだろうか。

人間の側から言えば、今年は放鳥10周年の年。せっかくの記念年なので、コウノリの将来を希望あるものにし、豊岡市民がコウノリと暮らすことを当たり前として次世代に引き継げるよう、強固な基盤づくりの議論ができればと思う。

■ コウノリ野生復帰が目指すもの

基盤を強固にするということは、時代や社会の状況が変わってもどしんと揺らがないようにしていくこと。マスタープランを構築することと言ってもいい。それにはまず、「何をを目指しているのか」を明確にすべきだ。そして、何度も何度も確認し合うことが必要だろう。なぜなら、常に意識していないと日常の中に埋没するから。日常生活はどうしても短期・個別の目標を描くし、世の中がそうなのだから経済優先で、合理的(楽な方へ)に流れていく。これをひととき整理して「目指すもの」をもう一度確認し合うには、区切りの年がいい機会だと思う。

「目指すもの」は極めて明瞭である。一言でいえば、「人と自然が共生する地域社会の実現」である。命題は簡潔だが、簡潔な故に拡大や過少に解釈されることが多い。「拡大解釈」は、つまりは「何でもあり」で、「田んぼをつぶして運動公園を造っても、コウノリは上空を飛ぶだろうから共生の姿だ」というのが典型例だ。「治水は最優先課題だから、コンクリート壁(パラペット)はラムサール登録エリアであっても矛盾しない」もまたしかりだ。反対に「過少解釈」の典型は、自然との共生を自然保護活動に限定して捉えることである。「コウノリ・生物のことばかり言う」という批判が基本例だ。

兵庫県・豊岡市は、野生復帰の当初から「コウノリも暮らせる社会は人にとっても豊かな社会」と位置づけ、昭和35年の出石川での農婦と牛とコウノリの写真を目指すべき共生のイメージ像に掲げてきた。これを基軸として、コウノリ保護増殖と自然再生、環境創造型農業、環境経済戦略等々を併行させて推進してきた。しかし近年は、多様な施策が広範に行われているから分かりにくいのか、どうも目指す像へ本当に向っているのか疑問に思うことが多い。このままではコウノリの持続可能な生息もおぼつかないのではないかと危惧すら覚えるのだ。私は、基盤づくりの大前提は、やはり土地利用計画をしっかり樹立することだと思うんだけど。

■ グリーン・インフラという考え方

先日、環境省の人から「グリーン・インフラ」というものの概念を教えていただいた。「自然力や自然のしゅみを賢く活用することで、社会と経済に寄与する国土形成手法」と定義され、人口減少社会における国土の劣化を防ぎ、さらに豊かな国土の形成を図る、というものらしい。つまり、これまで自然保護だけを目的とした施策では目立った進展がなかったことから、生態系の多面的機能をインフラ

(社会基盤)と位置づけて都市計画や政策に組み入れ、持続可能で魅力ある地域づくりを進めようとするものだ。地域の魅力・居住環境の向上、自然環境・生物多様性の保全・再生、防災・減災等に資するという。土地利用計画を基に、各省庁がネットワークを組み、総合的に展開しようとしている。

ン？ 豊岡市や私たちがコウノトリ野生復帰の過程で描いていたことではないか。

中央省庁において、今後強力にグリーン・インフラの理念で事業展開が進むことを期待しているし、まさに野生復帰の推進と多くの点でタイアップできそうだ。むしろ、兵庫県・豊岡市がその分野のモデルとして先導して欲しい。そうなれば、自然環境は安心して保全できるし、農業も持続可能性が見いだせるだろう。“コウノトリも暮らせる”豊岡の未来が明瞭に見えてくるのではないか。私たちコウノトリ湿地ネットの役割もスコンと当てはまる。つまり、本紙第25号で触れた休耕田、放棄田を活用したビオトープづくりによる生物多様性・防災・環境教育等でその一翼を担うという役割だ。(そうできるように、もっと力をつけねばならないが)

■ コウノトリの近未来に向けて

では、肝心のコウノトリ自身はどうすべきだろう。市内で取り組む方との連携強化とともに、すでに全国40府県に飛翔し舞い降りているので、各地の方とのネットワーク構築が急務だ。そのため、まず次のことに取り掛かることとした。

1つは、飛翔先の情報収集である。少なくともコウノトリの動向をリアルタイムで知っておかねば話にならない。そこで過日、野鳥観察に長けた会員が全国におられる日本野鳥の会に協力をお願いすることとした。全国の会員の方々から、その地に舞い降りたコウノトリの状況を当会に寄せていただければ百人力というわけだ。寄せられた情報は、コウノトリの郷公園と連携しながら、その都度HPで公開したい。

もう1つは、各地での受け皿整備の促進である。最初から行政が関わるといろんな面で壁がありそうなので、まずは個人・グループでの交流を深めることから始めることとした。幸い、エコ・トーププロジェクトの助成をいただくこととなったので、これを活用していくつかの地を訪問したいと考えている。

少しずつできることから、でもここという時には大胆に、をモットーに。



20150224 京丹後市にて
美王恵次郎氏撮影



20150207 京都府与謝郡にて 竹野功聖氏撮影



20150224 越前市白山にて 飛来したコウノトリを
観察する地元の子どもたち



戸島湿地でのコウノリの繁殖 (2014年の記録その1)

コウノリ湿地ネット:佐竹節夫、宮村良雄、森薫



ハチゴロウの戸島湿地に設置された人工巣塔での2014年の繁殖状況を以下のとおりまとめてみました。個体は、メス・J0294(2001年生)、オス・J0391(2004年生)のペアです。2008年春にペアを形成し、すぐに産卵、孵化、育雛、巣立ちを成し遂げ、以後毎年繁殖に成功しています。2013年の繁殖記録は昨年の本紙23号で報告していますので、比較しながらお読みいただければ幸いです。ただし、2014年はテリトリー内に侵入した独身のメス(J0017)によって生育中のヒナが3羽とも殺害(4月14日)されてしまったので、この記録は2回目の(やり直し)営巣によるものです。したがって、1回の繁殖で終わる通常の場合とはいくつかの点で相違があるかもしれませんが、その検証は今シーズンの繁殖記録も踏まえ、データを積み重ねながら、少しずつ行っていきたいと思います。

今回のデータ収集は、2013年と同様に巣塔から約150m離れた湿地管理棟の2階に設置した固定カメラで繁殖期の日の出から日没までを常時撮影し、後で映像をチェックして項目ごとに整理・集計したものです。

観察期間 2015年4月16日～8月12日(119日)

※2回目の営巣の最初の交尾日からヒナ3羽の巣立ち完了まで。

観察時間 1736時間10分

※日が差して明るくなる早朝から夕方暗くなって見えなくなるまで、目視が可能な限り観察しました。ただし、赤外線カメラではないため夜間の行動は把握できていません。

1. 交尾と産卵

(1) 交尾時期と回数

J0017は、4月14日に第1クラッチのヒナ(生後約1週間)を殺害した以後も執拗にペアのメス(J0294)への襲撃を繰り返し、オスがいないときは再三にわたって巣を乗っ取っていました。同月28日にはJ0294が巣を放棄したかのように南方に飛去したことがあり、我々をひやひやさせたものです。しかし、その間でも交尾はヒナが殺された2日後(16日)には再開され、以後毎日続きました。そして後述のように、産卵期での集中交尾となっていきます。

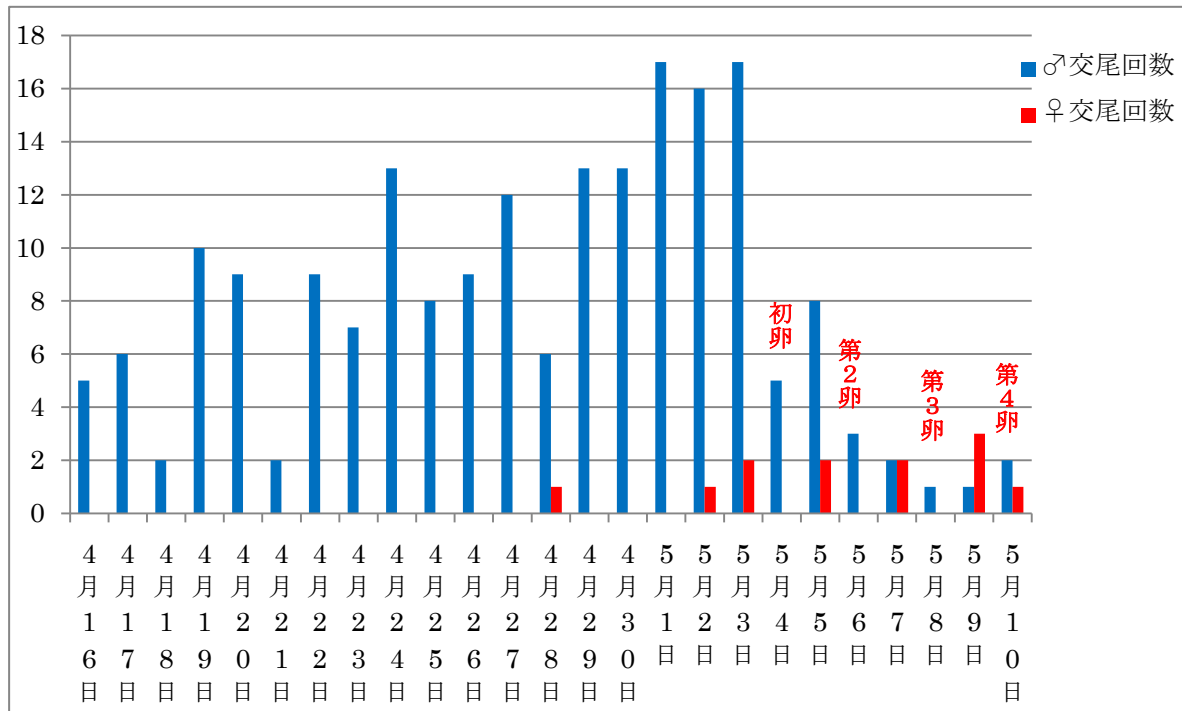
※J0017は、5月に入ると戸島から約5km南の赤石地区で独身オス(J0426)を見つけ、11日には巣塔でのマウンティング行動が確認されました。結果、戸島湿地には来る必要がなくなって戸島ペアに平和が訪れ、落ち着いて繁殖行動ができるようになったというわけです。J0017、J0426ペアは今年産卵・抱卵に至っており、ヒナの誕生が期待されます(2015年3月末現在)。

交尾日数 4月16日～5月10日 25日

交尾回数 合計207回(交尾行動1日最高19回、最低1回)

交尾回数を日にち毎にグラフで示し、産卵日(想定)を重ねたものが下記の表1です。

(表1 交尾回数と産卵日)



◎特記事項

メスがオスにマウンティング行動することが、今回も確認されました。前述の207回のうち12回がメスによるものです。単に親愛によるものか、他の意味がある—例えばオスに何らかの合図または何かを促している—のか、今のところ不明です。



20140425 戸島巣塔にてマウンティングしているのが J0294

(2)産卵日の推定

コウノリのメスは交尾(受精)後何日で産卵するのかは未だ解明されていませんし、いつの交尾で受精したのかも知る由はありません。また、産まれた卵の様子が管理棟から目視で確認できればいいのですが、卵はすり鉢状の巣の底にあるため、横から見ても分かりません。そこで私たちは、次の方法で総合的に判断し産卵日の特定を試みています。

① 親鳥の様子から

a 交尾回数から

産卵日の特定は、もちろん表1からも不可能です。しかし、交尾回数の推移から特徴を探ることはできそうです。コウノリは繁殖期でないとき、あるいは繁殖期であっても産卵直前でなくても交尾しますが、その場合は頻繁ではなく回数もバラバラです。4月28日までがその曲線を表しています。しかし、29日から5月3日まで毎日13~17回と2けたの交尾回数が安定して続き、5月4日以降は一気に1けたと急減しています。そして、10日が交尾最終で11日以降はありません。このことから、私たちは一過去7年間の例も加味して—基本を次のように考えました。

- ・交尾の回数が安定・連続して多くなったときが繁殖のための交尾であり、産卵はその最後日もしくはその前後日から始まるのではないか。ここでは、初卵の想定を5月2~4日としておきましょう。

・最終卵は、交尾終了日の当日もしくはその前日ではないか。仮に、5月9～10日としておきましょう。

※2013年度は、最終卵の前日で交尾が終了しています(パタパタ第23号)。

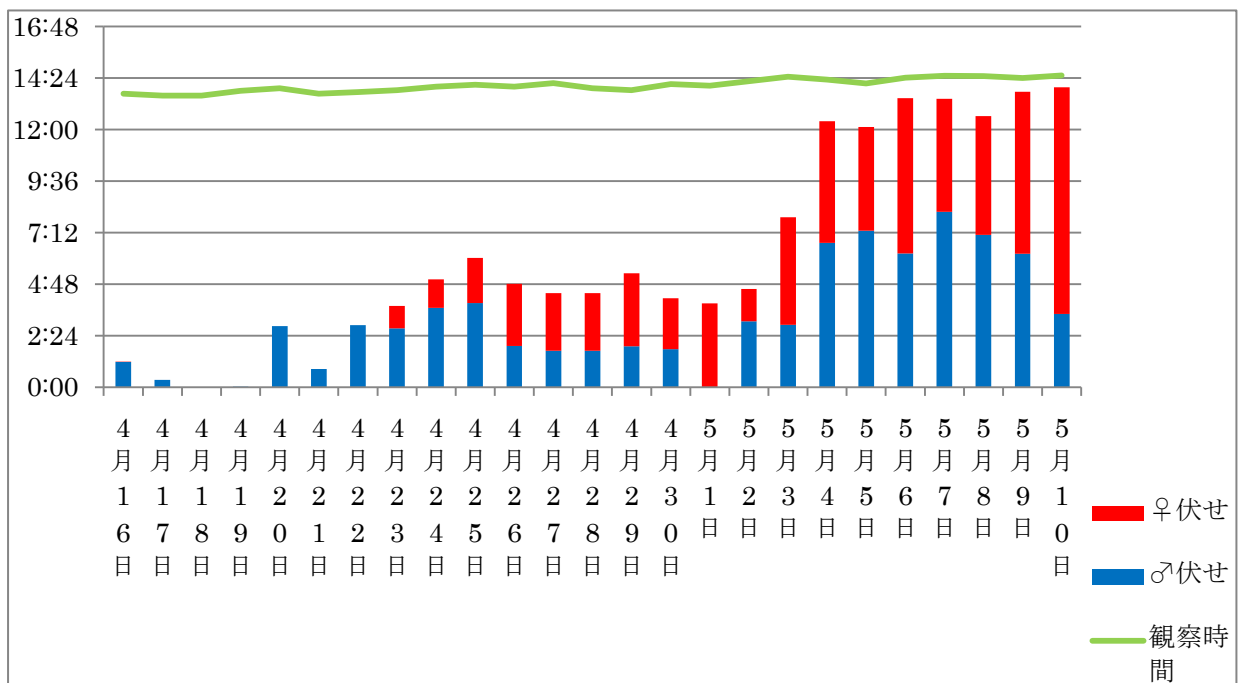
b 伏せている様子から

産卵と同時に抱卵体制に入ってくれば分かりやすいのですが、ことはそう単純ではありません。なぜなら、親鳥は産卵前から伏せますし、逆に、産卵しても第2卵もしくは第3卵までは本格的には抱かないからです。表2は伏せている時間の推移を示していますが、4月20日以降の時間数は5月2日まであまり差異がなく、3日に倍増し、翌4日から本格的に抱卵体制に入ったことを示しています。これを通例に当てはめると、本格抱卵の5月4日が第2卵もしくは第3卵となり、初卵は逆算して4月30日もしくは5月2日となります。

しかし、後述の要素を考えると、4月30日の産卵はあり得ないと思われます。であれば、2回目の営巣では通例が当てはまらず、初卵からいきなり本格的に抱卵することも頭に入れておく必要があります。第1回目の産卵から1か月が経過して晩春となり、気温が上昇していることも、親鳥に何らかの要素を与えているかもしれません。

さらに、J0017の襲撃状況も考慮しなければなりません。5月2日には巣に降り、巣台を占領してしまいました。これまでのJ0017の行動を考えれば、もし卵がそこにあれば巣外に捨てていた可能性大です。この日は、雌雄とも10分間、8分間と巣を空にしていたこともあり、これらのことから2日までは産卵していないと言えるでしょう。結果、初卵は5月3～4日と考えました。

〈表2 最終卵までの♀伏せ時間の推移〉



c 転卵行動の有無から

この行動は卵の存在を示す有力根拠となりますが、同様の行動として巣台の補修も行うため、クチバシの動きでその違いを読み取る必要があります。残念ながら、今回は十分に読み取ることができませんでした。

② 目視から

5月4日、隣接の山に登って、上方から望遠鏡で覗いて1個の卵を確認しました。コウノリは1日おきに1個ずつ産卵するので、初卵は3~4日と判断できます。

上記から総合して、初卵は5月3日未明から4日の間、1日おきに産卵し、最終卵(第4卵)は9日未明から10日の間と判断しました。このように計算すると、交尾は最終卵日で終わるという通例範囲に合致してきます。

※表1では、初卵日を5月3~4日ではなく、便宜上4日として示しています。2卵目以降も同様です。

(3) オス親の役割？

コウノリの夫婦は、雌雄が協働して巣をつくり、卵を抱き、子を育てます。つまり、同じ作業を一緒、もしくは交代して行くと捉えていましたが、今回の観察でそのいくつかはそれぞれの役割分担があるように思えました。

① 巣作りでは

今回の記録は第2回目営巣のため、最初からの巣作りではないことを考慮する必要がありますが、今回の観察では過去の1回繁殖の例(目視のみ)と差異はないように感じられました。

巣材運び

巣作りは、大小の木の枯枝で巣の形を整え、その中心部に枯れ草やワラなどを敷き詰めて行います。巣材を周辺から探し、巣に運ぶ役目はどうやらオスのようです。第2回営巣119日間で265回運んでいます。うちメスは33回しかありません。しかも、産卵前では全てオスが運んでいました。産卵後の巣材運びは巣の補修やフン等で汚れた草の取り換えです。

② 最初に伏せるのは

これも、オスの役目のようです。表2のとおり、最初の交尾日・4月16日にまず1時間10分伏せ、22日までオスだけが伏せています。あたかもベッドを馴染ませ、産まれる準備をしているかのようです。さらに、「ベッドが整ったからそろそろ産みなよ」とメスに産卵を促しているのかもしれませんが。メスは、オスが作ったベッドを自身も伏せて確認し、手直ししながら産卵の日を迎えるのでしょうか。

※「産卵の促し？」は、交尾回数等と関連させて詳しく見ていく必要があるでしょう。

今号はこれで終わります。次号では、抱卵、ヒナ孵化、育雛について報告します。何分、市民レベルで集計・分析していますし、どうしても個体へ感情移入しながら見ているので、捉え違いがあるかもしれません。どしどしご指摘ください。



2015年豊岡盆地におけるコウノトリ繁殖状況 コウノトリ湿地ネット会員 宮村さち子



今年の豊岡市におけるコウノトリの繁殖は8ペアとなっている。順調に抱卵が進めば4月中にはすべての巣塔でヒナの姿が見られるだろう。

今年の繁殖の特徴は、まず、新しいペアが2組成立したこと、そして、ここ数年順調に産卵、巣立ちを繰り返していたエヒメペアがオスのケガによる収容のため、繁殖が不可能となったことである。エヒメの新たな相手はまだ決まっていない様だ。

次に、安定して繁殖しているペアの巣塔が、若いコウノトリたちに襲撃される事態が出てきていることだ。戸島ではJ0017による襲撃が一昨年から繰り返されてきたが、今年は各巣塔で攻撃する若いコウノトリたちの姿が見られている。野外で生まれたコウノトリたちが繁殖年齢に達してきているということだろう。コウノトリたちが豊岡盆地の中で営巣したい場所(巣塔)は、重なってしまうだろう。

●戸島巣塔 ♀0294 ♂0391 (3月4日4卵確認)

※ 4月2日、ヒナ3羽、卵1個を確認

●赤石巣塔 ♀0017 ♂0426(今年新たにペアとなった)

※ 3月31日現在、抱卵中

●野上巣塔 ♀0362 ♂0001

※ 3月31日現在、抱卵中

●福田巣塔 ♀J0010 ♂J0020(昨年のペアの♀J0004が死亡、残った♂J0020は♀J0010と新たなペアとなる)

※ 3月29日吐き戻しが確認される

●庄境巣塔 ♀J0012 ♂J0021(産卵、孵化の一番手のペア、昨年も同様であった)

※ 3月23日に2羽のヒナの孵化が確認された。31日現在3羽のヒナが確認されている。

●百合地 ♀0228 ♂0275

※ 3月31日現在、抱卵中

●伊豆巣塔 ♀0296 ♂0381

※ 3月31日現在、抱卵中

●山本巣塔 ♀0399 ♂0011

※ 3月31日現在、抱卵中

(このほか、豊岡市内ではメス同士のペアによる抱卵行動などが確認されている。今年の繁殖については次号にてまた報告します)



20150316 赤石巣塔で抱卵中



上田市訪問記
 コウノトリ湿地ネット会員 森 薫



2月の中旬に、以前からJ0041の飛来情報を教えていただいていた、日本野鳥の会長野支部相談役の小柳さんより3月7日(土曜日)に上田創造館で、『コウノトリの愛称発表会』とコウノトリの郷公園の山岸園長の講演会開催のお手紙をいただきました。手紙には、愛称を募集されたところ、130通以上の応募があった旨が書かれていて、ぜひ参加させていただきたいと出かけてきました。6日の仕事を終え、名古屋に前泊して朝一番の電車に乗り上田市に着くと、駅で小柳さんとお仲間の高島さんが迎えてくださり、J0041が餌を採り、休息していた場所を案内してくださいました。上田市には大小100ヶ所のため池群があり、J0041は主にため池で餌を採っていたそうです。J0041が最初に飛来した北ノ入池は少し遠いようで、上田創造館の近くのため池を、塩吹池(しおふきいけ)～共有池(きょうゆういけ)～舌喰池(したくいけ)～幕宮池(まくみやいけ)～長池(ながいけ)の順に巡りました。これらの池は信濃川が貫く上田盆地に位置していて、一帯は「塩田平」と呼ばれ、千曲川沿岸には日本有数の河岸段丘が形成され、全国ため池100選にも選定されています。江戸初期から人柱伝説の民話が受け継がれている舌喰池では、失われた命を思いそっと手を合わせてきました。植物の種類が多い塩吹池は保護・保全区域となっています。オオイヌノフグリが花を咲かせていました。幕宮池は別所温泉の近くにあり、静かで憩えるところでした。山裾にあるこの池は、コウノトリにとっても憩いの場所では？と思えるところでした。冬には積雪は少なく箒で掃くほどのことですが、水道管が破裂するほどの寒い地域です。J0041は湧水があり、凍らない場所で餌を採っていたそうです。山々がそびえ、たくさんの水辺がある・・・コウノトリだけでなく、生きものも安心して暮らせる場所なのだと思います。

お昼にはJ0041を観察されている方にお会いすることができ、たくさんの写真を収められたDVDを見せてくださいました。缶バッチに起用された、高嶋さんが撮られた、氷の上に舞い降りたJ0041。魚を洗って食べていることや、大きなウシガエルを食べたこと・・・終戦記念日に撮られたJ0041の足が水面からピースで出ている写真。サギがJ0041の餌を狙っていると小枝を嘴で啜って追い払ったそうで「真田丸の上田にくると、勇ましくなるのか・・・」と、大いに話が盛り上がりました。

上田創造館に着くと、やさしいメロディが聞こえ、館長さん作詞作曲のコウノトリの歌を発表会の時間まで、みんなで練習して覚えました。ロビーではコウノトリの写真展も開かれ、いろんな表情のJ0041の写真が並んでいました。どれもが、撮影された方の思いが込められていて感動です。たくさんのサギの真ん中に佇むJ0041の写真には『女王様』と名付けられていました。豊岡では見られないコウノトリの姿でした。

いよいよ、愛称発表会。139通の応募の中から愛称は『ゆきちゃん』に決まりました。真田幸村にちなんで『ゆきちゃん』です。来年の大河ドラマは『真田幸村』とのことで皆さんの期待が込められています。

続いて、山岸園長が「上田市にコウノトリが舞い降りた訳」と題して講演されました。まず、コウノトリの飛来したニュース映像を見せてくださり『選んだ訳』を考えながら『ゆきちゃん』が塩田平を飛ぶ姿に見とれていました。山岸園長の故郷に飛んで行った『ゆきちゃん』。山岸園長は、「ため池だけに頼らない環境の整備を」と話されました。「コウノトリは、生物多様性を取り戻すシンボル。他の鳥、他の生きものを知ることが『ゆきちゃん』をより深く知ることになる」と話され、コウノトリ野生復帰の大元をわかりやすく説明してくださいました。「コウノトリをより深く知るためには、

他の生きもののことを知ること」このことを、心に留めてたいです。会場には、鳥だけでなく、昆虫や植物を研究される方が大勢来られていました。

お手紙をくださった小柳さんをはじめ、案内をしてくださった高嶋さん、上田市で出会った皆様に、感謝の気持ちを込めて、名刺をたくさんお渡しして、コウノトリの繁殖の季節に『城崎温泉に泊まって、コウノトリの子育て見学』のご案内をさせていただきました。

J0041 は静岡県に飛来していて出会えませんでした。(どうにか行方だけでもお知らせできたら…と、心当たりを尋ねてみましたがわかりませんでした)上田市から帰り、豊岡で J0041 を見守っておられた日高町の水島さん、成田さんに報告を兼ねて、お土産を届けに伺うと、「ゆきちゃんですか…可愛がってもらってるとるんですね」「さびしゅうて…」「女の人は、結婚したら苗字が変わるで、上田市では『ゆきちゃん』って呼んでもらって可愛がってもらったらええです」上田市でのお話をする、「そうですか、ほお～」と喜んでおられました。大河ドラマも楽しみにしておられます。DVD をお渡しすると、地域で順番に見られたそうで、「上田市は、ええところですね」と電話をくださいました。その後の12日、「森さん、帰ってきました」「森さんが連れて帰ってくれたと喜んどります。はは・は・」と弾んだ声で電話をいただきました。すぐに、小柳さん、高嶋さん、上田創造館の皆さんにお知らせし、「元気でなによりホッとしました」と言われました。ところが、翌日の朝から行方が分からなくなり20日に上田市に戻ったと高嶋さんから連絡をいただきました。

コウノトリも人も行き来し、生き生きと…上田市を訪問して、元気になって帰ってきました。



塩吹池



上田創造館近くの田んぼ



舌喰池



上田創造館『愛称発表会』



2014年 下宮クイ湿地のカエルたち
 コウノリ湿地ネット会員 宮村良雄



2006年からコウノリの餌場になる湿地を目指してクイ湿地管理作業を続けてきました。下宮集落の西に位置する小さな谷にある休耕田を利用した湿地ですが、川とは直接つながっていないため、魚類については自然繁殖を望めず、近くから取って来たドジョウ・メダカを放流してきました。水生昆虫とカエル類の自然繁殖が可能と考え、特にカエルの増加を目指してきました。2014年は湿地の中でいくつかの新しい試みをやってみました。

●モリアオガエル●

クイ湿地が谷部に位置していることから、モリアオガエルの繁殖が可能ではないかと考え、以前兵庫県姫路市にある「伊勢自然の郷・環境学習センター」で見たモリアオガエルの人工産卵場(施設)をまねて作ってみました。今回作った人工産卵場は、近くの杉の枝を切り、畦から斜めに突き出すだけです。6月14日枝にモリアオガエルが産卵してくれました。モリアオガエルの産卵は、杉の枝にとどまらず、湿地の上にかかる高いヒノキの枝や水路の上にかかる木・湿地内のショウブなどに産卵してくれました。昨年までにはなかったことです。少しの努力でモリアオガエルの保護に貢献できることが分かりました。今年は産卵場を増やすことを計画しています。

(写真 6月14日 クイ湿地8)



6月から始めたクイ湿地3の定点トラップ型生きもの調査の結果から、シュレーゲルアオガエルとトノサマガエルの違いが見えてきました。生きもの調査はバケツに穴をあけて入口からだんだん奥になるほど狭くなる構造で、入るのは簡単ですが出るのが少し難しい構造になっています。

(クイ湿地3 南東隅トラップ)

日付	6/5	6/10	6/15	6/23	6/24	6/28	7/5	7/11	7/17	7/22	7/25	7/29	8/3
オタマジャクシ	73	106	162	14	83	223	66	126	126	75	45	7	4
シュレーゲルアオガエル	1			62		5		2					

●シュレーゲルアオガエル●

6月23日、トラップの中は、まだシッポのあるシュレーゲルアオガエルでいっぱいでした。その後も

7月11日までシュレーゲルアオガエルが、入ることはありましたが、ごくわずかで、6月23日がシュレーゲルのオタマジャクシが成体になるピークでした。

(写真 バケツにへばりつくシュレーゲルアオガエル)



●トノサマガエル●

6月23日以降もオタマジャクシがトラップにたくさん入りました。それは、それ以前のシュレーゲルアオガエルではなく、トノサマガエルのオタマジャクシに変わりました。そして8月3日4匹のオタマジャクシで今年のオタマジャクシの季節は終わりました。トノサマガエルのオタマジャクシが、トラップの中でカエルになるような現場はみられませんでした。



6月24日



7月11日

●アカガエル(ニホン)●

2012年からアカガエルの卵塊調査を実施してきました。結果は以下の表の通りです。2012年は、豪雪の年でアカガエルの産卵がいつもよりかなり遅くなったと記憶しています。カエルを増やすことを特に目指してきた湿地管理ですから、アカガエルだけを見てもそれなりの成果を上げてきたと思われ、卵塊調査で特徴な結果として湿地7の状況があります。湿地7はその立地や湿地の様子などからもっとたくさん卵塊が確認されてもよいと考えるのですが、なぜか一向にその数は増えません。アカガエルが何を基準に産卵場所を決めているのかぜひ知りたいのですが……

(アカガエル卵塊調査結果)

	湿地 2	湿地 3	湿地 4	湿地 6	湿地 7	湿地 8	湿地 9	湿地 10	湿地 11	合計
2012年3月20日	8	11	85	26	10	37	39	15	33	264
2013年3月3日	28	24	154	72	0	23	63	103	113	580
2014年3月9日	3	8	67	9	2	40	25	51	94	299
2015年3月4日	4	32	41	119	1	98	95	95	58	543
2015年3月4日開放水面	60%	50%	25%	100%	60%	98%	60%	80%	30%	



ククイ湿地全景



今回の調査で気になったこと

今年の卵塊調査で大変気になることがありました。調査は湿地の周辺部も含めて実施したのですが、ククイ湿地の東にある谷の棚田で卵塊が全く確認されなかったことです。3月4日以降も気になって何度か見てきたのですが、やはり卵塊を見つけることができませんでした。以前たくさん卵塊を見た記憶があるので、隣の谷ではアカガエルが絶滅した可能性も否定できない状況だと考えています。今後の継続した調査の必要性を感じました。



今後の課題

ククイ湿地では上記4種類のカエルが確実に繁殖していますが、ツチガエル・ヌマガエル・アマガエルははっきりと見たという記憶がありません。記憶違いもあるので確かではありませんが、今後3種類のカエルが本当にいないのか、最も近い生息場所とククイ湿地との距離、そしてククイ湿地と生息場所との環境の違いを調べるのが大切だと考えています。そして3種類のカエルを誘導できないかなどを検討していきたいと思います。



ハチゴロウの戸島湿地便り (1~3月編)

戸島湿地管理棟 森 薫



■ 戸島ペア(J0294♀・J0391♂)の産卵を確認しました

2月27日(金曜日)の午前、巣塔近くの山に登り1つの卵を確認しました。今年で8年連続の繁殖となり、これまでに15羽のヒナが巣立っています。親鳥のJ0391♂は11歳、J0294♀は14歳になります。

昨年末と1月16日、J0294を追い払いJ0017♀とJ0426♂が巣塔にとまることがあり、その後も、J0017は戸島湿地周辺の電柱にとまり巣に降りようともしていました。また、J0017とJ0030♀の姉妹で飛来して巣塔上空を旋回し巣に近づいたりもしていて、今年の繁殖も多難なことと思っていましたが、J0017とJ0426は赤石人工巣塔で繁殖しているようで万事めでたしとなることを願っています。その後もJ0030は時々飛来してきますが、J0030のとまっている電柱にJ0294が飛んで行くとJ0030は逃げてしまい、J0030とJ0294ではJ0294の方が上位にあるような気がします。コウノトリの力関係は、『逃げる』方が弱いのでしょうか。生きもの全般でいうと、そのような気もします。人間同士の力関係も同じでしょうね。「逃げるが勝ち」ということもあります。そんなことを考えているうちに戸島ペアの周辺も落ち着いてきました。J0391が巣材運びを繰り返し、2月26日に初卵、28日に2個、4日に4個の卵を確認しました。6日に再度確認に行くと卵は3個になっていました。



戸島人工巣塔の産卵・孵化確認は巣塔近くの急斜面を登り、木々の間から親鳥が立ち上がった瞬間に目視と写真により確認しています。昨年のように確認のタイミングが合わずに産卵数と孵化数が合わないことや、今回のように途中で卵の数が減ってしまった場合もあります。先日、来館者の方から「卵の数が減ったなら、巣塔の下に行って卵を落としていないか確認に行かないのか。落とした卵をコウノトリの郷公園へ持って行かなくていいのか」との質問がありました。私は「卵を探すことも大切だと思いますがここではしていません。コウノトリを驚かせないことを一番に考えているので巣塔の近くにはいかないようにしています」とお答えしました。急斜面からすり鉢状の巣の中をのぞくのはなかなか大変です。周りの木々を伐り巣の中が覗きやすいようにした方がいいという意見もありますが、出来るだけ目立たないようにとの配慮のためです。その代わりに、2013年から管理棟内に設置されたカメラから、繁殖期のコウノトリの動向を読み取り産卵日を推測して観察を続けています。コウノトリの行動をよく見て、山に登って確認するタイミングを見極めることが今後の課題となっています。

■ 湿地では

毎年1月に淡水域に砂を撒き、水深の調節や飛び洲を作り直しています。今年もクレーン車で砂を運び深くなっているところに砂を撒き2日間で完了しました。3月には、心豊かな500人会より4名の女性の方が、休館日に駐車場の植生の手入れとゴミ拾いをしてくださいました。

3月7日、ヘラサギが飛来し22日まで滞在していました。カメラマンの方が早朝より来館され、コウノトリとのツーショットが撮れるのはここだけ・・・とシャッターチャンスを狙っておられました。大阪から来られたご夫婦は、「幸せですわ」と帰られ、小野市からお越しのご夫婦は気温2度の外気のなかでも、それはそれは楽しそうにコウノトリや野鳥の観察・撮影をされていました。「お陰さまで、マイホーム造りから、愛のささやきまでシッカリ撮りました。コウノトリに癒され楽しい一日でした」とご満悦でした。

■ コウノトリの飛来情報が寄せられています

☆南島原市の賛助会員の方が、長崎新聞に記載された五島列島に飛来したコウノトリ(J0092♀・J0094♂)の記事を送ってくださり、当会ニューズレターでおなじみの成田市雄さんが田んぼで満面の笑顔で農業について話されている記事も添えられていました。

☆韓国からも『モニターツアー』(豊岡市企画)の皆さんが来館され、韓国に飛来したJ0051♀とJ0092♀の様子を聞かせてくださいました。



20150213 戸島湿地を訪問された韓国からのお客様

☆鳴門市に飛来しているJ0481とJ0480・J0044の情報は日本野鳥の会徳島支部から寄せられています。和歌山と鳴門市を行き来した足環のないコウノトリについては、それぞれが写真を送ってくださり、コウノトリ郷公園の方によってその鳥の特徴から同じ個体ということが分かりました。

☆越前市白山地区で環境学習中にJ0028と足環のないコウノトリが飛来したときの様子は、『農家と水辺を守る会』の方から、その時の皆さんの感動の様子が綴られたメールが届きました。

☆奄美大島に滞在しているJ0067は、船旅に出かけた際に出会った方がその様子を知らせて下さいます。豊岡では見られない南の島で暮らしているコウノトリの姿です。



2015年1月～3月 奄美大島で暮らすJ0067 奥昭仁氏撮影

☆隣町の京丹後市久美浜町からは、賛助会員の方からリアルタイムの情報が届いています。コウノトリの個体番号ごとに見守る人の顔が浮かびます。同時に、亡くなった個体、行方不明、怪我をして収容された個体、剥製になって甦った個体にも、餌場づくりに頑張っていた人や、雨の日にも風の日にも見守っておられた人たちの顔が浮かび、コウノトリの数だけ物語があります。管理棟に寄せられるコウノトリの情報は、当会の目撃情報管理人(宮村会員)に送り、宮村会員が日々の情報をまとめてホームページに記載しています。

■ 本年度も、日本損害保険代理業協会よりグリーン基金を寄贈していただきました

3月4日(水曜日)の午後、日本損害保険代理業協会よりグリーン基金の授与式が管理棟で行われ、兵庫県損害保険代理業協会代表理事の鈴木さんより寄付金をいただきました。

CSR 活動として、年2回の作業もしていただき感謝しています。早速に、役員の方々と今年度の活動日を相談され、7月と11月に決まりました。



■ ラムサール条約事務局・広報担当者が来訪されました

休耕田・放棄田を湿地状にしてコウノトリの餌場に供する事業地の一つ・田結地区では、地元住民主体の取り組みが特徴的です。これまで、経団連自然保護基金等から助成を受けながら進めてきましたが、2年前からは新たにダノン・エビアン水基金の助成を受けてきました。ラムサール条約事務局の仲介によるものです。

この3月で一応プロジェクトが終了することに伴い、3月14日、同条約事務局の広報担当であるカメラ・チャルマーさんがカメラマンと一緒に現地を視察されました。住民がたくましく明るく、行政、研究者、企業、当会等と協働して生物調査や湿地づくりに取り組まれていることに好感を持たれたようでした。



〈写真 カメラさんも加わって新規の湿地を造成〉



コウノトリ湿地ネット賛助会員名簿(新規入会)



小野市 柴田美津子

(2015年1月1日～3月31日)

ありがとうございました。これからもよろしく願いいたします。



思うこと

コウノトリ湿地ネット代表 佐竹 節夫



春は人事異動の季節。豊岡市役所でも4月1日付の発表があり、コウノトリ共生課も坂本成彦課長補佐、宮垣均主査、森崎州平主任、コウノトリ文化館の中奥政明館長が他部署に異動となりました。皆さん、野生復帰の取り組みに個性を出しながら邁進され、当会とも親しくしてもらっていたので淋し

いですが、異動は役所の慣わし、仕方ありません。

とは言っても、とくに宮垣氏は平成14年4月のコウノトリ共生推進課発足当初から私と一緒に(私は平成20年3月末で退職しましたが)仕事をしてきました。自然再生や地域づくり施策の立ち上げに、共に汗を流したのを感慨深く思い出します。

皆さん、新職場でのますますのご活躍を期待しています。そして、どの仕事でも根っこに「コウノトリ」を意識し続けていただければと願っています。



編集後記



春休みの城崎温泉は若い人で賑わっている。管理棟にも卒業旅行のグループが多数来館されている。先日10名の男子高校生が「のんびりしたいと連泊で来た」と…羨ましいかぎりだ。携帯電話にメール、いつでもどこでも誰とでもコミュニケーションがとれる時代でも、『枕を並べて語り合う時間』は、かけがえのない時間なのだと思う。「今度は彼女と来るから」…「結婚してからね」と心の中で呟き見送った。それにしても、一番のんびりしたいのは『お母さん』だと思うのだが… (森)

今、春真っ盛りです。辺りの山々を見渡すと、あちこちに紙吹雪のような桜の花が咲いています。どこに行っても桜尽くし。ちょっと引いてしまうあまのじゃくな私ですが、桜餅の魅力には勝てなくて何度も食べてしまいました。(宮村)



コウノトリ湿地ネット入会のご案内

湿地ネットでは、「正会員」「賛助会員」となり、活動を支えてくださる方を募っています。

※正会員 入会金2000円、年会費2000円 (積極的に、会の活動を支えてくださる方)

※賛助員会 年会費2000円 (年3~4回ニュースレターをお送りします。)

その他自由に活動にご参加ください)

会の趣旨にご賛同いただける方は、ぜひご入会をお願いいたします。

振込先

郵便振替 (加入者名) NPOコウノトリ湿地ネット / (口座番号) 00900-0-194128

